

ブラジルにおける人種意識の変遷 — 人種民主主義から人種主義へ —

伊 藤 秋 仁

要 旨

Desde a hora de mudança da Corte de Portugal ao Rio de Janeiro, sempre existiam preocupações demográficas no Brasil. Dentre as quais um dos problemas mais importantes para a elite brasileira era tratamento das pessoas de cor que constituíam um número considerável no povo brasileiro. A elite, que acreditava em supremacia dos brancos, pretendia branquear o povo, e, ao mesmo tempo, queria manter a hierarquia pacificamente onde os brancos ficavam na classe superior e os não-brancos ocupavam a classe baixa.

Na segunda metade do século XIX e no começo do século XX, houve uma entrada em massa dos imigrantes europeus, e quando acabou esse fluxo, a elite apresentou a ideia de branqueamento do povo brasileiro baseado na eugenia, especialmente neo-lamarckismo.

Na década de 1930, quando surgiu a necessidade de integrar o povo de várias raças e etnias, apresentou-se uma ideia da democracia racial. Essa ideia conciliou até os pretos e os pardos miseráveis e o povo, desde os brancos ricos até os pretos pobres, inteiramente aceitou-a com entusiasmo.

Mas no final do século XX, com a realização dos congressos internacionais a respeito dos direitos humanos, anti-racismo, ambiência etc., os movimentos negros se conscientizaram da situação e a injustiça racial, o povo brasileiro começou a reconhecer a realidade, e têm sido promovidas as ações afirmativas.

Essa mudança da consciência das relações raciais no Brasil acompanhava e era fortalecida pelas obras dos pesquisadores da área. O Brasil e os EUA são os países grandes e multirraciais e, historicamente, têm semelhança na formação social. Com isso, chamou grande atenção dos pesquisadores norte-americanos e dos brasileiros e a comparação dos dois países tem sido feita desde a década de 1930.

Os pesquisadores podem ser divididos em duas partes por gerações. A primeira geração que reconfirmou a democracia racial é, na sua maioria, constituída dos norte-americanos. Os pesquisadores da segunda geração acusam racismo existente no Brasil. No final deste artigo se faz uma análise das obras dos pesquisadores de ambas gerações.

キーワード：ブラジル，人種的不平等，人種民主主義，白人化，
アフターマティヴ・アクション

1. はじめに一合衆国との比較

南北アメリカを代表する大国であるブラジルと合衆国は、その社会形成の歴史過程において類似性が認められる。また、現在、両国ともアフリカ系住民を数多く抱えており¹⁾、人種問題はいまだ解決していない。

両国の社会形成を大まかに辿ってみると次のようになる。ヨーロッパ人が新世界に進出し、先住民を軍事的に制圧した後、植民地を創設した。その後、ヨーロッパ人が入植し、世界市場に組み入れられたプランテーションが形成され、その維持と発展のために大量のアフリカ人が輸入された²⁾。両国とも奴隷制を発達させ、黒人奴隷に対するヨーロッパ人の優越と支配が確立し、19世紀後半には奴隷が解放された。その前後から20世紀初めにかけて、主としてヨーロッパからの大量の自発的移民により人口増加を図った。

奴隷解放後も、黒人に対する差別的な慣行は継続し、合衆国は法的に、ブラジルは法を用いずに白人を上位、黒人を下位とする人種により階層化した社会が定着した。その後、合衆国では公民権運動を契機に、またブラジルでは、20世紀末の社会変化とその後の南アフリカのダーバンで行われた国連による「人種主義、人種差別、排外主義および不寛容に反対する世界会議」への参加を契機として、差別是正の動きが具体化し始めた³⁾。

合衆国では20世紀後半から人種関係が国家全体の大きなテーマであった。アカデミックな研究対象となり、多くの研究者を輩出し、相当の成果が生まれた。上述のとおり、同じような歴史的背景をもつブラジルは、合衆国の人種研究において格好な比較対象であった。かつては、合衆国が黒人に対する法的な隔離を行ったのに対し、ブラジルは、政治・社会・法律上、人種による差別がなく平等な「人種民主主義」の国として、盛んに比較研究が行われた。その後、合衆国で法的な差別が廃止され、新たな人種関係についての研究が模索された。合衆国で人種隔離が非合法化すると、人種主義は非公式のものとして見えにくくなった。また、ブラジルの人種の寛容なイメージを覆す研究が内外で数多く発表されるようになり、今度は、ブラジルは人種差別の国とみなされるようになった。それと同時にブラジルは、法的な強制をせずに人種支配を行った「ブラジル方式」⁴⁾と呼ばれた一先駆的な例となり、新たな研究対象となった。そして再びブラジルの人種関係が脚光を浴びるようになっている。

合衆国は、白人と黒人を法的に隔離してきた。公民権改革以後、法律が廃止された後でも、白人と黒人の距離が保たれ、多くは分離したままである。人種により居住地が住み分けられ、異人種間の婚姻や交友関係も制限されている。

…合衆国において、公民権の改革後も存続する黒人差別や人種関係を規定する主要な要因は、現在も継続している人種による居住地の分離にあるとする。…白人と黒人との間の距離を維持しているのは強固な社会的規範だけでなく、物理的かつ社会的な距離こそが高度の人種的不平等の原因になっていると断定している。反対に、極端な居住地の分離が見られなければ、人種差別と不平等は縮小すると仮定している。このように分離こそがアメリカの人種支配の要であると考えられている。⁵⁾

一方、ブラジルの人種関係の特徴は、「混血」であるとする。ジルベルト・フレイレ⁶⁾はルゾ・

トロピカリズモ（ポルトガル熱帯生態学）を唱えている。その論に従えば、ポルトガルとアフリカが近接していることから、歴史的にムーア人との交流があり、ポルトガル人はアフリカ人に対する偏見がなく、従来、ポルトガル人男性は色の浅黒い女性を好む傾向がある。植民地時代、ブラジルにおいてポルトガル人女性の数が限られていたこともあり、ポルトガル人男性は、インディオやアフリカ人女性を好み、結果的に混血が進んだとする。フレイレの説の妥当性や社会行動の現実はともかく、このような人種混淆がブラジルの人種関係、もしくはブラジル人の人種意識の根幹にあったことは間違いない。ロベルト・ダ・マタは次のように述べている。

ブラジル人以外の合衆国ならびにその他の国の読者がブラジルを理解するためには、西洋社会全般を支配するのは純潔の志向であるという概念を捨て去る必要がある⁷⁾。

人種関係における純潔の対義語は曖昧さであろう。ブラジルでは、白人と黒人の中間に混血人がおり、その境目は明確ではない。一方、合衆国では「血の一滴ルール」により少しでも黒人の血が混じっていれば白人と見なさないなど、境界をはっきりと定めた⁸⁾。

合衆国の研究者は自国の人種関係の検証のために、しばしばブラジルの事例を対照させたが、その研究結果は、おそらく合衆国よりもブラジルに大きな影響を与えた。合衆国との対比の中で、ブラジルは自身の人種関係を理解し、規定してきた。本稿は、このような前提を踏まえ、ブラジルの国家的な人種に対する意識の変遷を辿り、中でも重要な人種民主主義から人種主義への変化に重要な役割を果たした米伯の二世代の人種研究者の業績に焦点を当てている。ブラジルの人種関係は合衆国と異なる側面を持つ。本稿の目的は、合衆国の社会学者エドワード・テルズの分析を援用し、ブラジルの人種関係に明確なパースペクティブを提示することを目的としている。

2. 国家的な人種に対する意識の歴史の変遷

2-1 多数の非白人が存在することの劣等感（19世紀全般）

ブラジル人の人種意識は、植民地時代末期より、欧米の影響を受けている。1808年、ポルトガル王室がブラジルに到着することで、ヨーロッパ人すなわち白人至上主義が強化された⁹⁾。1822年には独立を果たしたが、植民地時代の社会秩序は維持され、王室を頂点とする白人至上主義の社会は変わらなかった。一方、表1のとおり1800年当時、総人口約410万人のうち、白人は92万人（22.4%）に過ぎなかった。また、混血人は122万人（29.8%）、黒人は196万人（47.8%）で人口の4分の3を有色人が占めていた。白人至上主義の中、このような数多くの黒人・混血人口の存在は、対外的に大きな負い目となり、国民の統合は非常に困難になっていた。

表1 ブラジルの年代別・人種別住民数／%

人種\年	1800	1880	1890	1940
白人	920,000 / 22.4	3,787,000 / 38.1	6,303,000 / 44.1	26,171,000 / 63.5
混血人	1,220,000 / 29.8	4,187,000 / 42.2	5,900,000 / 41.2	8,744,000 / 21.2
黒人	1,960,000 / 47.8	1,954,000 / 19.7	2,097,000 / 14.7	6,035,000 / 14.6
黄色人	0 / 0	0 / 0	0 / 0	247,320 / 0.6
合計	4,100,000 / 100	9,928,000 / 100	14,300,000 / 100	41,197,320 / 100

出所 Lambert, Jacques, *Os dois Brasis*, São Paulo, Editora Nacional, 1967, p. 87.

奴隷制時代の白人至上主義の根拠は、「神により生物学的に定められたもの」とされており¹⁰⁾、生物学的とは言いながら、科学的な裏付けはなく、その根拠は「科学ではなく、むしろ道徳と宗教であった」¹¹⁾。南北アメリカ大陸で奴隷制が廃止されるようになると、人種支配について新たな根拠が求められ、それは優生学へと向かった。

…その学問は、「よりよい血統という目標を達成するために遺伝的知識を社会的に活用する」方法を発見することを企図していた…。当時、優生学は、黒人を劣等でムラートを墮落していると思っていた。その上、優生学者は、ブラジルのような熱帯の気候が人の生物的・精神的高貴さを弱め、それゆえブラジル人は、生物的な退化を例証していると考えていた。¹²⁾

しかしながら、優生学は、支配層であるブラジルのエリートにも刃を突きつけることになった。というのも、ヨーロッパ人の視点から見ると、ブラジルのエリートの中に少なからぬ「非白人」が存在していたからである¹³⁾。白人至上主義の思想は受け入れられたものの、エリート層の中に、非白人の血統を引くものが見られたのは事実であった。他の分野でも傑出したムラート（混血人）が存在していた。その一人にブラジルの最も偉大な作家であると見なされているマシャド・デ・アシスもいた。

1880年代、優生学の強い影響を受けたバイアの医学校教授ライムンド・ニナ・ロドリゲス¹⁴⁾は、アフリカ人が劣等であると表明したけれども¹⁵⁾、ブラジルの現実を鑑み、ムラートの扱いにはためらいを見せた¹⁶⁾。それまでのように単純に混血人の存在を墮落していると思わずのではなく、ムラートについては、優秀・通常・墮落の三つに分類すべきだと考えた。

また、当時のブラジルを代表とする知識人であったシルヴィオ・ロメロ¹⁷⁾が指摘したように、優生学に従えば、「黒人やとくにインディオはポルトガル人に劣ることは認めるが、ポルトガル人自身もゲルマン・サクソン人に劣って」¹⁸⁾ いると考えざるをえなくなるなど、ブラジルのエリートはジレンマに陥った。

2-2 ヨーロッパ人移民の増加と人口の白人化（19世紀後半と20世紀前半）

このような袋小路の中、ブラジルの人種関係について、新たな方向性をもたらしたのは、1870年代以後の大量のヨーロッパ人移民の流入であった。奴隷労働が制限を受ける中¹⁹⁾、サン・パウロを中心とする好調なコーヒー生産は、海外から大量の移民を引きつけた。1884年から1939年の55年間で、およそ416万人の移民がブラジルに到着し、その8割をイタリア人、ポルトガル人、スペイン人、ドイツ人が占めた²⁰⁾。1800年には22.4%に過ぎなかった白人人口は、表1のとおり1880年には38.1%、1890年には44.1%と10年で6%も増加した。絶対数を見ても1880年の378万7000人から630万3000人と大幅に増加、1890年代にはさらに120万人以上のヨーロッパ系の移民が加わった²¹⁾。黒人は、1850年の奴隷貿易廃止後、実質的にほとんど入国しておらず、その相対的な割合は、1800年の47.8%から1880年には19.7%、1890年には14.7%に減少した²²⁾。

さらに白人の増加は、ブラジルに新たな人種についての見通しをももたらした。すなわち、当時、生物の進化についてフランスで主流であった新ラマルク説²³⁾の影響を受けた、ブラジル独自の優生学である「白人化」である。ブラジルの学者は、「遺伝的な欠陥は、1世代のうちに克服できる」²⁴⁾ とし、黒人と混血人は劣等であるという認識を再確認しながらも、生殖能力に優れ、遺伝

的にも優位にある白人と非白人が人種混淆することで、黒人の要素は消去され、最終的には、ほとんど白人のブラジル人が生み出されるとされた²⁵⁾。

表1の1890年と1950年の人口を比べてみると、ほぼ総人口が3倍に膨れ上がり、白人人口は、新規入国者も合わせ、総人口の63.5%を占めた。一方、黒人人口の比率は14.7%から14.6%とほぼ横ばいであり、混血人の人口比は41.2%から21.2%と20ポイントも減少している。しかしながら、その後の年代別人種構成(表2)を見ると、白人の割合は、1940年をピークに、以後少しずつ減少しており、混血人の割合も、20世紀に入り、増加傾向にあるが、ほぼ40%で変わっていない。黒人人口は微減を続けていたが、2000年には6%に上昇している²⁶⁾。しかしながら黒人人口については人種区分の曖昧さの影響を受けやすく、これをもって黒人人口が増加したとは言いにくい。いずれにせよ、データを見た限り、白人化の傾向はうかがうことができない。

表2 ブラジルの年代別人種構成 (%)

年	白人	混血人	黒人	黄色人	不明
1960	61.0	29.5	8.7	0.7	0.1
1980	54.77	38.45	5.8	0.63	0.26
1990	55.3	39.3	4.9	0.5	-

出所 富野幹雄「現代ブラジルの人種関係」『アカデミア』人文・科学編第70号、抜刷、南山大学、1999年

2-3 人種民主主義 (1930年代から1980年代)

移民による白人人口の急増が「白人化」の背景に見られたが、「望ましい」とされたヨーロッパ人移民は、1920年代には著しく減少し、東欧や中近東からの移民も増加した。また、1908年に始まった日本人移民が、1920年代から1930年代にかけて急増すると、優生学的見地から、日本人移民を制限すべきであるとの声が挙がった²⁷⁾。

1929年、第1回ブラジル優生学会議が開催され、ブラジルへの日本人の移住の制限とアフリカ系北アメリカ人の導入が議論された。反人種差別主義者でコロンビア大学教授であったフランツ・ボアズ²⁸⁾の薫陶を受けた同会議の議長エドガル・ロケッテ=ピントは、優生学と人種を結びつけることに強硬に反対し、人種混淆は退化的でなく正常であると主張した。また出席者の一人である優生学者のフェルナンド・マガリャンエスは、ブラジル人のほとんどが何らかの混血人であることを想起させた。同会議では、最終的に、人種的な移入制限は多数決により否決された。ロケッテ=ピントによれば「標のない道に踏み出すのに恐れるのにも似た、現実的な自信の欠如」²⁹⁾のような感覚を抱きながらも、ブラジルは、合衆国やドイツのような人種差別を行う国々とは一線を画すようになった。

1930年に臨時大統領に就任したジェットウリオ・ヴァルガスは、1945年に辞職するまで、ブラジル近代化のため、数多くの改革を実施し、国民の圧倒的な支持を受けた。国民の統合を目指していたことから、人種的な排除も行わず、黒人層の多くが彼を支持した。ヴァルガスの大統領就任後、黒人により組織されたブラジル黒人戦線も政党となり、彼を支持した。1937年、「新国家」体制下、政党が禁止され、ブラジル黒人戦線も解散を余儀なくされたものの、ヴァルガスは黒人に対する援助を続け、彼らの産業構造への統合が進んだ³⁰⁾。

ヴァルガスの国民の統合・黒人に対する寛容の姿勢と合致したのは、ジルベルト・フレイレがその著書『大邸宅と奴隷小屋』³¹⁾で主張した「人種民主主義」であった。テルズは、ここで用い

られている「民主主義」という語は、政治制度よりも、同語のスペイン語のコノテーションである「友愛」や流動的な社会関係のニュアンスが強いことを指摘している³²⁾。フレイレは、合衆国と比較して穏やかとされる人種関係の根源を植民地時代に求めた。農場主を頂点とする巨大なプランテーションの家父長制社会を巨大な大釜に見立て、温情的な奴隷制度の下、奴隷は人間的に扱われ、混血が進行したと描いた。結果として、異人種に対する反発がなくなり、調和し、同化が進んだとした。これまで否定的に捉えられていた人種混濁を、ブラジルの国家的な特徴かつ象徴であるとし、肯定的に捉えなおした。

人種民主主義のイデオロギーは、公式に人種隔離を行う国々や人種間闘争のある国々、特に合衆国に対する強力なアンチテーゼとなり、ブラジルは優越感とともに人種主義の存在しない国としての国家アイデンティティを強かに推し進めた。ヴァルガスは、リオ・デ・ジャネイロのカーニバルを国家的な行事とし、黒人や混血人が主役を務めるそのイメージを国内にも国外にも発信し、人種民主主義のイメージを植えつけることに成功した。

1964年に始まった軍事政権下においても、人種民主主義の考えはさらに推し進められた。ブラジル政府によるアフリカ諸国との関係強化も図られるなど、ブラジルは自身のアフリカ性をさらに強調するようになった。アフリカ系の新興宗教³³⁾も広く認知されるなど、アフリカ文化はますますブラジル人にとって身近になった。さらに黒人選手ペレが率いるサッカーのブラジル代表がワールドカップを制すると、その熱狂は国民を揺るがし、人種民主主義は、ブラジル人にとって、大いに誇るべきアイデンティティとなった。

一方、このような喧騒とは裏腹に、1968年から1974年の経済発展の利益を受けたのは白人を中心とする中間層であり、非白人を中心とする貧困層との人種的不平等は拡大した。権威主義体制下、このような状況を背景に、人種民主主義に異議を申し立てた人種研究者³⁴⁾は、強制的に国外追放された。

2-4 人種民主主義の否定と人種的不平等の肯定（1980年代半ばから）

軍事政権末期より、少しずつ黒人³⁵⁾運動組織が活動する余地が生まれるようになった。黒人のアイデンティティも次第に高まった³⁶⁾。1978年には「黒人統一運動」が設立され、1984年にはサン・パウロ州に「黒人共同体の参加と発展のための審議会」が創設された³⁷⁾。1985年、軍政から民政へと移管すると、黒人運動はさらに活気付いた。ジョゼ・サルネイ大統領は、同年、「補償措置のための黒人審議会」を提案した³⁸⁾。1988年は、奴隷制廃止100周年であり、多くのデモが行われ、多数の動員が見られた。同年、ブラジル憲法に反人種差別ならびに反性差別が謳われ、その後の多くの反人種差別法の基礎となった。

政治や市民社会の分野でも黒人の活動が目立つようになった。中でも連邦議員を務めたアブディアス・ド・ナシメント³⁹⁾やベネディタ・ダ・シルヴァ⁴⁰⁾は黒人を擁護する活動を積極的に行った。そのほか黒人の州知事も何人が現れ、ブラジル最大の労組の書記長になったヴィセンテ・パウロ・ダ・シルヴァ⁴¹⁾は、1994年のもっとも影響力のある市民社会活動家に選出された。また数多くの黒人運動NGOが出現し、組織を強化し、活発に活動するようになった。

世論もそれに応えるようになった。1995年の人種意識に関する調査（表3）によれば、「白人が黒人に人種偏見を抱いている」ことを認めた白人は、多少の地域差はあるが、ブラジル全国で9割近く（89%）に上っている。同様の見解を示した混血人は88%、黒人は91%であった。ブラ

ジル国民はようやく人種民主主義の神話から解き放たれた。

表3 肌の色と地域別の人種混濁支持の割合と人種偏見を認める割合（ブラジル，1995年）

「黒人に対して白人は人種偏見を抱いている」に賛成の割合（％）

	ブラジル	北東部	南東部	南部	北部／中西部
白人	89	83	91	90	87
混血人	88	85	91	87	89
黒人	91	89	94	82	93

「人種混濁は良いことである」に賛成の割合

白人	88	76	88	85	90
混血人	87	87	87	89	91
黒人	89	90	90	88	88

出所：Data Folha Survey, 1995.

ブラジル国民のほとんどが白人は黒人に人種偏見を抱いていることを認めていたが、政府による積極的な差別是正策が実施されるまでには、さらに時間がかかった。1995年は、現在のペルナンブコ州内のパルマーレスの逃亡奴隷共同社会（キロンボ）の伝説的な指導者ズンビの没後300年に当たり、その命日（11月20日）には、首都ブラジリアに数千人もの人が集い、デモ行進を行った。黒人運動の活動家も参加したこの示威行動の趣旨は、人種差別撲滅に向けての政府の実効的な政策と黒人に対する賠償の要求であった。当時のカルドーズ大統領は、このような要求に対し、ブラジルの大統領として初めて、ブラジルにおいて50年近く政府の公式見解であった人種民主主義を否定し、人種主義が存在することを認めた。

カルドーズ大統領に対する、黒人運動側の期待は大きかった。なぜなら、かつて、彼はフロレスタン・フェルナンデスの指導の下、ブラジル南部の人種関係の調査を行い、その後、人種に関する著作も発表し、軍政下で亡命を余儀なくされた過去を持つ世界的に著名な社会学者であるからである。人種関係に関して、これまでのいかなる政府関係者よりも高い学識を有していることは疑いなかった。黒人運動の活動家は、今後の政府の変化に大いに期待した。

カルドーズがアフーマティヴ・アクションの実施に意欲を持っていたことは疑いない。黒人運動活動家と会談したその日、人種的公正を促進し、黒人住民の地位向上を目指す「省庁間作業部会」の創設を約束した。1996年の「多文化主義と人種主義についての会議」において、カルドーズは「(人種差別と偏見は)単に言葉によってだけでなく、人種や社会集団、階級の間のより民主的な関係の構築をなしとげる手順や方法を通じて、その仮面をはぎ、反撃されなければならない」⁴²⁾と宣言した。また、同年、黒人のみならず、女性、障害者、先住民に対する「国家人権計画」が発表され、短期、中期、長期のそれぞれの目標が策定された。黒人については、短期的にはその価値を高める公的な政策の検討、中期的には職業訓練や大学、高度な技術を要する分野への参入を可能にするアフーマティヴ・アクションの展開、長期的にはあらゆる差別的な法律の廃止と人種差別根絶のための政策と規定の改善、社会経済的な地位を高めるための賠償政策を創設するというものであった。

しかしながら、反発は予想以上に大きかった。省庁間作業部会は意見書を作成し、黒人の包摂に向けての具体化を求めたが、政府の関係官僚からの協力が得られず、頓挫した。人種民主主義

の神話は根強く、カルドゾ政権を後援する学会の重鎮たちも、人種的不平等の存在を否定しなかったものの、ブラジルを合衆国と同様の人種主義国家であるとみなすことに対して、抵抗を示した。各人種が先鋭化せずに共存し、平和裏に人種混雑が行われていることこそが、ブラジルの美点なのであり、また目標としての「人種民主主義」はいまだ有効であるとした。アフーマティヴ・アクションの実施は人種的に受益者を特定することにより、国民の分離につながり、ブラジルを合衆国化するものとして賛成しなかった。このような反発に対し、カルドゾも政治的な判断を迫られ、時宜を考慮せざるをえなくなった。膨らんだ黒人運動の活動家の期待も徐々にしぼんでいった。

2-5 アフーマティヴ・アクション（1990年代半ばから）

そのような中でも黒人運動はその歩みを止めることはなかった。人種的不平等の認識は、市民に広く浸透しつつあった。連邦政府による統一的な政策には至らなかったものの、小規模ながら、各地で差別是正の動きが見られるようになった⁴³⁾。ブラジルの10大都市圏における1995年から1999年までの間に124の人種差別根絶のための計画が確認されている⁴⁴⁾。何らかの形で黒人の地位向上を目指した計画が110件、その他14件は人種を問わず人種差別の根絶を目指したものであった。その計画の主催者は、NGOが42件、連邦ならびに地方自治体政府が29件、政府とNGOの連携が17件、残りは大学、教会、政党、企業であった。それらの計画内容を詳しく見ると、連邦主催によるものは黒人を対象としたキャリアアップのための研修であった⁴⁵⁾。地方自治体の試みとしては、ポルト・アレグレ市における市の契約する労働者の黒人枠（5%）、バイア州における州の宣伝・広報の黒人枠（全体の3分の1）を設定している。NGOは、人種的不平等の啓発セミナーを積極的に行い、教会、大学、NGOでは黒人のための大学入学の予備コースの開催や、進学をサポートを行っている。

そのほかの大きな成果としては、キロンボの土地所有の連邦政府による承認が見られる⁴⁶⁾。奴隷制の時代に、奥地に逃れた逃亡奴隷によって築かれたキロンボの現住人は、そのような逃亡奴隷の子孫であり、長年の間、同地に居住している。奴隷制に抵抗し続けたキロンボは黒人運動のシンボルとして機能するようになった。

国内において人種民主主義の神話が崩壊し、国民の多くが人種的不平等の存在を認め、一部で差別是正の動きが見られるようになっても、ブラジル政府は人種的に寛容な国であるという世界に広く知られたイメージをそう易々と手放そうとはしなかった⁴⁷⁾。中でももっとも頑強な壁は外務省⁴⁸⁾であった。外交官のほとんどが白人からなる閉鎖的なエリート集団であり、人種民主主義を奉ずるブラジルの道徳上の優位さについて他国に主張し続けていた。

1992年、リオ・デ・ジャネイロで開催された地球環境サミット⁴⁹⁾には、人権や環境の先進各国や多くの世界を代表するNGOが参加した。軍政から民政に移管し、まだ未成熟だったブラジルの市民社会は、このイベントの開催を機に、世界の先端の活動に触れることで意識を高め、同時に世界のNGOとの絆を築いた。この時期以降、ブラジルの黒人運動組織も、人権意識が国際的に普及し高まる中、コンピューターネットワークや国際メディアを利用し、国境を越え、知名度を高めた。また、ラテンアメリカ、合衆国などの黒人運動組織と連携し、機動力を発揮するとともに、ブラジルで黒人の置かれている状況を発信したり、制度の改善を提案したり、法律を根拠に司法の場で争ったりするようになった。

2001年、南アフリカのダーバンで行われた国連による「人種主義、人種差別、排外主義および不寛容に反対する世界会議」が、ブラジルの人種的不公平についての認識や人権意識をさらに高めることになった。世界会議の準備のための地域会議についての騒動⁵⁰⁾がメディアを通じてさかんに伝えられた。世界会議参加を前に、黒人運動活動家とブラジル政府高官の間で対話が進んだ。政府主催の準備会がブラジル国内各地で開催されるなど、政府も積極的に関与するようになった。世界会議には、先住民や女性団体の代表を含め200人近い活動家のほか、政府代表の約15人が参加した。会議の報告長官にブラジルの女性黒人運動活動家が就任し、会議におけるブラジルの重要性は高まった。奴隷制に対する賠償金の要求とイスラエルに対する制裁の提案にアメリカが退場、植民地化と奴隷制に対する賠償をヨーロッパ共同体が否決、人権侵害についてアジアも消極的な姿勢を示す中、ブラジルやラテンアメリカ諸国の積極性が際立った。

ブラジルのメディアは、連日、同会議に関する情報を積極的に伝えた⁵¹⁾。世論の高まりは、多くの変化をもたらした。アフーマティヴ・アクションの実施を巡る対立は霧散し、政府は実施を約束した。人種問題によって、国際的な立場でブラジルの発言力が増したことから、ブラジル外務省は立場を一転させ、黒人運動を積極的に支援し、人権問題を取り上げるようになった。

会議終盤、農業開発大臣は、公務員の黒人枠や、黒人の農村共同体に対する融資などの支援、公有地に存在するキロンボに対する土地所有権の授与を命じた。会議終了後⁵²⁾、リオ・デ・ジャネイロ州立大学の入学定員に黒人・混血人・公立学校卒業者枠が設けられた。司法省、外務省でも人種割当てを中心とするアフーマティヴ・アクションが導入された。

2003年1月、労働者党のルーラ⁵³⁾が大統領に選出されると、3人の黒人ならびに混血人の大臣が誕生した。文化大臣に著名なポピュラー音楽のシンガーソングライターのジルベルト・ジル、社会支援と促進のための特命担当大臣に、黒人女性活動家・政治家として着実なキャリアを築いてきたベネディタ・ダ・シルヴァ、環境大臣にはマリーナ・シルヴァ⁵⁴⁾を指名した。そのほか議会の要職や、最高裁判所長官などにも黒人を登用した。そのほか「人種包摂促進策事務局」を創設し、その局長には黒人女性を任命した。

ルーラ政権は、黒人の大学入学枠を拡充させるとともに、アフリカ文化と歴史を初等・中等教育のカリキュラム導入を進める法律を施行するなど、黒人運動と労働者党とルーラ政権は密接な関係を築き上げている。

一方、2003年からはアフーマティヴ・アクションに対する抵抗も少なからず、生まれている。大学入学の割当て制の合憲性が法廷で争われ、割当て制によって、不合格になった白人学生は「差し止め命令による救済」を求め嘆願書を提出している。割当て制により不利益をこうむる白人の中間層の中には、はっきりとこのような政策に反対を表明する者も現れるようになり、政策の再検討を迫っている。

3. 人種民主主義と人種主義

ブラジルにおいて中間層の大半が白人であり、貧困層の大半が非白人である事実は、ほとんど変化していない。人種的不平等は植民地時代から現在に至るまで変わらず存在している。それにも関わらず、おおよそ1980年代を境に、ブラジルの人種関係を表す概念は正反対のもの、すなわち「人種民主主義」から「人種主義」に変化した。

このような意識の変化の背景には、第2章で概要を述べたとおり、いくつかの要因が影響しているが、「人種民主主義」と「人種主義」は、それぞれ科学的な手法で立証されていた。そして時代の変遷の中で、後者はますます優勢となっており、前者は人種的不平等を隠蔽するための体のいい建前に過ぎなかつたと断定された。また、それを立証した研究者やその著作も、科学的でない恣意性に満ちたものとされ、「人種民主主義とその時代」を批判する際に取り上げられることはあっても、評価されることは少なくなった。

テルズは、人種民主主義を追認した研究者を第1世代、人種主義を摘発し、より広範な資料に基づいてその持続性や構造を指摘する研究者を第2世代に分類した。その上で、彼は、合衆国との比較の中で、人口学的、文化的、経済的、政治的影響の下にある人種分類、異人種間の婚姻、居住地の分離などの要因（彼は変数と呼んでいる）を考慮しながら、それぞれの主張を検証している。第1世代は、合衆国の社会学において同化の明確な指針⁵⁵⁾である異人種間の婚姻や人種混交から、ブラジルでは黒人が包摂されていると見なしたのに対し、第2世代は、貧困層のほとんどが非白人であることから、黒人は社会的に排除されているとする。テルズは、現在の第2世代によって示される人種主義絶対主義と第1世代の研究に対する軽視をやんわりと批判し、人種混交と人種的不平等が共存しうる可能性を示唆し⁵⁶⁾、さらに、ブラジルの人種関係を水平的関係と垂直的關係に分け、その独自性を分析している。

3-1 第1世代（1930年代から1960年代）

フランツ・ボアズの指導を受けたジルベルト・フレイレは、合衆国の特に南部の状況を知悉することで、ブラジル北東部の特色を際立たせることができた。フレイレは『大邸宅と奴隷小屋』（1933年）の中でブラジルの人種関係を肯定的に描いた。彼の提示した「人種民主主義」は、ジム・クロウによって法的な人種隔離を行っていた合衆国の人種研究者に大きな衝撃を与えた。その後、ブラジルは合衆国の人種研究者にとって重要な比較対象となり、多くの研究者がブラジルを訪れた。1940年代の最も影響力の大きな研究はドナルド・ピアソン⁵⁷⁾であり、彼の研究結果はフレイレの人種民主主義を追認するものであった⁵⁸⁾。国民の統合を目指したブラジル政府も、合衆国発のこのような研究結果に後押しされるかのように、「人種民主主義」に重きを置き、人種的寛容のイメージを世界に発信するようになった。

多くの合衆国の研究者が、ブラジルの人種関係を合衆国よりも良好であると判断した大きな原因の一つは、研究対象の地域がブラジルの北東部中心であったことが挙げられるであろう。テルズが水平的関係と呼ぶ、人種的な流動性や異人種間の婚姻などは、同地域において特に顕著であった。合衆国の社会学理論における同化の重要な指標である異人種間の婚姻や居住地分離の度合いから判断すると、同地には、合衆国で見られる物理的・心理的な人種隔離が見られず、白人と非白人の統合は進んでいるとされた。現存する人種的不平等は、人種に起因するのではなく、1888年に廃止された奴隷制の負の遺産である階級の影響であり、水平的な統合が進展するにつれて、そのような不平等は消滅すると予想した。

現在、利用可能な資料を用いて、人種の水平的な関係について調べてみると、北東部に限らず、地域差はあるものの、ブラジル全土で、合衆国に比べてはつきりと人種的統合の高さを示している⁵⁹⁾。人種間の反感や反目は少なく、人種関係が穏やかである証でもある。この傾向は貧困層において特に顕著であり、「人種民主主義」は、この限りにおいては、真実に近い。

3-2 第2世代（1950年代以降）

1950年代、人種民主主義にはっきりと異議を唱えたのは、ブラジル人の研究者であるフロレスタン・フェルナンデス⁶⁰⁾であった。合衆国とブラジルの研究者からなる共同ユネスコ調査団⁶¹⁾の一員であったフェルナンデスとブラジル人の彼の同僚たちは、サン・パウロの工業化の中、労働市場において、黒人は、身分や教育などの社会的影響では説明できない不利益を被っていると、そこには人種主義が存在すると看破した。彼らの研究対象の地域は、主として南東部や南部地域であった。同地域には、大量のヨーロッパ人移民が移入し、黒人や混血人よりもヨーロッパ系の白人の数が圧倒的に多かった。そのような地域においては、黒人は蔑視されており、人種混濁もあまり見られなかった。第1世代が重視した合衆国との比較や水平的関係についてはほとんど言及せず、工業化と人種的不平等という垂直的関係の現実を直視した。

民政移管後の情報開示や調査手法の発展が、ブラジルにおける広範な人種的不平等の現実を証拠付けた。ブラジルは世界で最も富の配分が不平等な国であり、貧困層の大部分は非白人であり、非白人が社会上昇を図る際のガラス天井の存在も明らかになっている⁶²⁾。このことから、ブラジルの人種関係は、かつての合衆国や南アフリカの公式の隔離と実質的に変わらないとの意見も見られる。広範な資料を基にブラジルの人種的不平等を指摘する研究は、1980年以後、さかんに発表されている⁶³⁾。

3-3 人種混濁と人種的排除の共存

差別の存在を否定した第1世代と、人種的不平等を指摘した第2世代には、はっきりとした相違点が存在している。研究対象地域について、第1世代は非白人の割合が高く未開発の北東部地域であったのに対し、第2世代は、白人の割合が多い工業化の進んだ南部・南東部が主であった。また研究者の国籍の違いも明確であった。第1世代の研究者の多くが米国人であったのに対し、第2世代はブラジル人が主であった。そのことは、第1世代が法的な人種隔離を行っていた合衆国との比較の視点を大いに有していたのに対し、第2世代はそのような意識が比較的少なかったことを表わしている。

地域による差異はあるものの、合衆国との比較で言えば、現在でも第1世代と第2世代の結論は共に有効である。合衆国に比べて、水平的関係における人種の壁はずっと低い。一方、垂直的關係を見ると、人種による貧富の差は非常に激しく、社会的な昇進に際しても人種間の差は大きい。非白人の社会上昇には見えないガラス天井が存在している。合衆国では対立する概念であると考えられている人種混濁と人種的排除がブラジルでは共存している。

4. まとめ

ブラジルの人種混濁は広範に及んでおり、白人と見なされている者も、人種秩序の中で白人の優位性を享受しながら、時と場合により、自身に非白人の血が混ざっていることを指摘し、人種的排除とは無縁であることを正当化しようとする⁶⁴⁾。ブラジルでは、「人種 (raça)」という用語よりも「肌の色 (cor)」という表現が好まれ、人種区分を示す「白人 (branco)」、「混血人 (pardo)」、「黒人 (preto)」よりも、モレーノ (moreno: 小麦色の肌の色) やロウロ (louro: 金色と茶色の間、ブロンド) というカテゴリーを好んで用いる。モレーノは浅黒い肌の白人や黒人までを内包し、ロ

ウロはヨーロッパ系であることを言外に示しており、非白人を示すこともある。「白人」はアジア人を内包しないが（アジア人は通常「黄色人」）、かつて黄禍論に対する反論として「日本人はポルトガル人より白い」として「白人」と見なされたこともあった⁶⁵⁾。人種秩序の下位には、肌の色の白から黒の色のスペクトルの中で黒い端に近い人が多いが、分類がはっきりしていないことから、社会的に下位にある肌の色の黒い人も、自称するに、社会的に低位にあるというコンテキストをもつ「黒人」という言葉を避ける傾向にある。このような人種の曖昧さは、階級や地位とも結びついており、「財産が肌の色を白くする」という俗諺も、一面の真実を示している。

人種はしばしば冗談やからかいの対象になる。多様な民族的背景を持つ者が多いことから、人種や民族についての冗談は、日常の中で頻繁に交わされている。合衆国的なポリティカルコレクトネスの考え方からすれば、受け入れられないような言葉が日常的に、あらゆる場面で交わされ、笑い飛ばされる。それは人種や民族の水平的な関係の近さを示すとともに、対立を先鋭化せず、適度にガス抜きを行うブラジル文化の好ましい一面であるかもしれない。しかし、社会的な弱者である黒人に対する冗談には、侮蔑的なステレオタイプが描かれており、それが彼らの社会上昇を拒むガラス天井の一因になっている可能性も否定できない。

垂直的な人種的不平等の是正のため、合衆国的な人種二分法に従い、ブラジルの黒人運動家は、元来、黒人を示す語であるネグロを、アフリカ系の祖先を持つ者全般に敷衍し、社会的な動員や抗議、提案のための集団のアイデンティティの確立に努めてきた。ここまである程度の成果は生まれつつあるように思われるが、人種的な分類の曖昧さにもかかわらず、人種的な区分を設けることには反発も見られる。

ブラジルの人種関係は、光の当て方により、異なる様相を見せる。人種混淆に起因する人種的曖昧さはブラジルの好ましい一面であると評価するブラジル人は多いだろう。一方、「人種民主主義」が社会的な人種的不平等を見えにくくしてきた面も否めない。人種民主主義が信奉されてきた50年間で、非白人が社会的な低位に固定化され、白人と非白人の間の所得格差は広まった。世界的に貧富の差がもっとも激しい現実⁶⁶⁾に、今度は、ブラジル人の多くが自国を人種主義がもっとも激しい国であると見なすようになった。ブラジルの社会問題を摘発する映画が数多く製作され、ブラジル国内だけでなく、世界中で広く鑑賞されるようになった。

極端な熱狂はブラジルの国民性であるかもしれない。しかしながら、水平的な関係において、ブラジルが異なる人種・民族を平和的に融合してきた経験は否定されるものではないだろう。人種的な対立により、国民の間に亀裂が生じない方法で、社会の不平等を是正する措置がとられるべきである。

注

- 1) 「ブラジルと合衆国は、総人口ならびにアフリカ系の人口において、西半球最大の国である。ブラジル人は、黒人あるいは混血人の数がおよそ8000万人で、ブラジルの1億7300万人のほぼ半数を占めていると言われている。ブラジルの白人の多数がアフリカ人の血を引いているため、アフリカ人の祖先を持つブラジル人の数は、おそらく1億人以上にのぼると思われる。一方、合衆国には約3000万人の黒人がおり、約2億7000万人の総人口のおよそ12%に当たる。」 Telles,

- E. Edward, *Race in Another America: The Significance of Skin Color in Brazil*, Princeton, Princeton University Press, 2004, p. 14 (同書は『ブラジルの人種的不平等とは正策 (仮題)』伊藤秋仁・富野幹雄共訳、明石書店、2011年1月31日発行予定)。
- 2) 1500年から1870年までのアフリカ人奴隷の移入数は、英領北米・合衆国が合計約39万9000人で、その9割ほどが、1701年から1810年の間に移入された。ブラジルへの移入数は約364万6800人とされ、19世紀前半まで盛んに輸入された(細野昭雄『ラテンアメリカの経済』東京大学出版会、1983年、23頁)。
 - 3) 差別是正に際して、アメリカと南アフリカでは人種差別的な状況に対する動員や大々的な抗議行動が行われたのに対し、ブラジルではほとんど行われなかった。この点について、マルクスは、国民国家成立の経緯に視座を定め、三国を比較し、「法的な人種差別は必ずしも不可欠ではなかった」と「人種差別に対する抗議は必然的に行われるものではない」ことを詳述している。アンソニー・W・マルクス(富野幹雄・岩野一郎・伊藤秋仁訳)『黒人差別と国民国家』春風社、2007年を参照のこと。
 - 4) 「教育もほとんど受けず専門的な技術も持たない黒人の集団は、都市部における反不法居住者法により強硬な適用をもって、以前にもまして厳しく周縁へおいやられるだろう。それは時に『ブラジル式オプション』と呼ばれる。つまりそのグループ内部から人種的性格を除去することで、アパルトヘイトは終焉したとの印象を与えようというものだ。しかしその要点はアフリカーナのフォルク(民)が、全般において支配的立場を維持することと南アフリカが国民国家であり続けることだった。—アパルトヘイト後の南アフリカのあり方を政府の役人がどう語ったかについてのアリスター・スパークスの談(1990)」Telles, op.cit., p. 194.
 - 5) *ibid.*, p. 3.
 - 6) 1900-1987年。アメリカのコロンビア大学でフランツ・ボアズの指導を受ける。1924年にブラジルに帰国。1933年に主著『大邸宅と奴隷小屋』(邦訳は、鈴木茂訳、上下巻、日本経済評論社、2005年)を発表した。
 - 7) Telles, op.cit., p. 4.
 - 8) 合衆国の黒人奴隷はブラジルに比べれば、数も少ないことから、貴重な財産でもあり、管理され、生殖により維持された。一方、ブラジルは輸入されるアフリカ人奴隷の数が多く、言わば、使い捨てであり、管理や維持、まして生殖についての配慮はあまりなかった。ブラジルでは自由を手にする奴隷や混血人が存在したことから、合衆国に比べ温情的な奴隷制であったと伝えられることが多いが、ブラジルの奴隷制が過酷ではなかったとは考えられない。キロンボと呼ばれる逃亡奴隷村が作られ、植民地政府と対立も生まれた。マルクスは、この経験から、19世紀、20世紀初頭のブラジルのエリートたちは、潜在的に黒人に対する恐れがあったとしている。マルクス、前掲書、83-94頁参照のこと。
 - 9) 王室はブラジル到着当初より、ドイツ人を中心としたヨーロッパ人入植者の導入を図っていたが、規模は小さかった。拙著「19世紀前半のブラジルにおける外国人入植者の導入」京都外国語大学『COSMICA』第38号(2009年)参照のこと。
 - 10) マルクス、前掲書、21頁。
 - 11) Telles, op.cit., p. 26.
 - 12) *ibid.*, p. 26.
 - 13) ブラジルでは、文化・科学においてヨーロッパ、中でもフランスの影響が大きかった。そのフランスから、差別主義的な人種観に基づき、ブラジルの人種的劣等性を指摘する文献の出版が相次いだ。その代表者はゴビノー伯爵(1816-1882年)であった。彼は、その著書『人種不平等論』(1856年)で、アーリア人は支配人種であり、非白人よりも優れていると見なした。その後、彼は、

1869年から70年にかけて、フランス政府代表としてブラジルに滞在した。彼は、ブラジルの人種混淆の状況について「人種混淆が（親交のあった国王を例外として）ブラジル人のすべての階級にわたって、果ては『最上層の家族の人々に』さえも影響を及ぼし、彼らを醜く、怠惰で繁殖力をなくさせていると論評した」(ibid., p. 26)。マーク・B・アダムズ編著（佐藤雅彦訳）『比較「優生学」史』現代書館、1998年、第4章も参照のこと。

- 14) 1862-1906年。法医学者。ヨーロッパの優生学を信奉。犯罪者の頭蓋の容積を測定するなど、犯罪者の先天的な要因を指摘したイタリアの犯罪学者チェザーレ・ロンブローゾの支持者であった。
- 15) ロドリゲスは人種別の刑法の適用を提案した。黒人の自由意志の能力に疑問を呈し、帝国の刑法の自由意志の原則から黒人を除外すべきであるとした (Telles, op.cit., p. 27)。
- 16) スキッドモアによれば、ロドリゲス自身も混血人であったとされる。
- 17) 1851-1914年。詩人、哲学者で文芸評論家でもあった。
- 18) Telles, op.cit., p. 28.
- 19) 1850年に奴隷貿易が廃止され、1850年に約250万人いた奴隷人口は減少を続け、1872年には151万人に減少した。1871年には新生児自由法、1885年には60歳以上の奴隷を解放する「セクサジェナリオス法」が公布された。1887年には奴隷の数が約64万人まで減少し、1888年、王女イザベルによって奴隷制の廃止を定める「黄金法」が施行された。
- 20) 移民の国籍ならび人数の詳細については、Oliveira, Lucia Lippi, *O Brasil dos immigrants*, Rio de Janeiro, Jorge Zahar Editor, 2001, p. 23を参照のこと。奴隷の減少による価格の高騰と労働力不足から、1889年までは民間の資金で、その後は公的資金によって、移民の渡航が援助された。白人であることは「望ましい」移民の第一要件であったが、加えてカトリックであり、ラテン系であればさらによいとされた。
- 21) Telles, op.cit., p. 29.
- 22) しかしながら、黒人と混血人との区分はあいまいであり、階層やその他の社会的な環境の影響を受けやすいため、人種区分には注意を要する。
- 23) フランスの博物学者ラマルク(1744-1829年)を祖とするラマルク説は、生物がよく使用する器官は世代を重ねるに従って発達し、使用されない器官は次第に退化するとする用不用説と、環境への対応として獲得された個体の形質の遺伝を骨子とする。新ラマルク説は、遺伝子の変化に対する環境的要因を重視したもので、ラマルク説を修正・拡大した。また生物の進化に対して、生物の主体性も認めている。
- 24) Telles, op.cit., p. 28.
- 25) 1911年、ロンドン大学で開催された「第1回世界人種会議」で、ブラジルの国立博物館館長ジョアン・パティスタ・ラセルダは、100年後のブラジルの人口予測を発表し、2012年には黒人は消滅し、混血人も3%に減少すると述べた (Skidmore, Thomas E, *Black into White: Race and Nationality in Brazilian Thought*, New York, Oxford University Press, 1974, p. 67)。
- 26) Telles, op.cit., p. 30の図2.1より。
- 27) 1925年、医学会の権威であったミゲル・コウトがこのような発言を行った。
- 28) 1858-1942年。ドイツ系ユダヤ人で、合衆国に帰化した。
- 29) Telles, op.cit., p. 32。ステパンは「優生学者たちの胸中に潜む人種問題への不安を抑えて、人種的社交辞令が大勝した」(アダムズ、前掲書、294頁)と述べている。
- 30) 黒人と移民は、労働者として競合していた。ヴァルガスは白人の移民に対する援助を打ち切り、自国生まれの労働者を移民との競争から守るための政策を行った。
- 31) 注6を参照のこと。

- 32) Telles, *op.cit.*, p. 33.
- 33) ウンバンダのこと。中産階級の白人や軍の将校も同宗教の指導者になった (*ibid.*, p. 40.)
- 34) そのような学者には、フロレスタン・フェルナンデス (1920-1995 年)、アブディアス・ド・ナシメント (1914 年-)、オクタヴィオ・イアンニ (1926-2004 年)、ブラジル前大統領フェルナンド・エンリケ・カルドーゾ (1931 年-) などがいる。
- 35) ポルトガル語では社会運動や政治の場面では、黒人についてネグロ (negro) が用いられる。しかしながらこのネグロという語が示すのは黒人に限らない。アフリカ系の混血人も含まれる。非白人のニュアンスに近いが、アジア人や先住民は含まれないことが多い。いわゆる黒人のみを指すポルトガル語ではプレト (preto) である。
- 36) 黒人音楽 (ソウルやファンク)、バイアの黒人だけのカーニバル・グループ (イレ・アイレ) など、特に文化面での貢献が大きかった。
- 37) 目的は「黒人の利益を擁護する法律の監視や州議会と対して、計画を提案することと、人種差別と警察の暴力についての申し立てと調査であった」(Telles, *op.cit.*, p. 48)。
- 38) この計画は実施されなかった。サルネイは1930年生まれ。1985年から1990年まで大統領を務めた。
- 39) 注 34 参照。
- 40) 1942 年生まれ。リオ・デ・ジャネイロ州知事も務めた。
- 41) 1956 年生まれ。通称ヴィセンチーニョ。
- 42) Telles, *op.cit.*, p 56.
- 43) 法制化には大きな壁が見られる。差別是正策は増してきているものの、法的な根拠がないことから、持続性においては脆弱であることは否めない。
- 44) Telles, *op.cit.*, p 58.
- 45) 中には公共事業参入のための入札方法に関する指導も含まれている。
- 46) それ以前に先住民に対する土地の承認が行われている。
- 47) 2000 年はポルトガル人のブラジル発見からちょうど 500 周年にあたる。4 月 22 日はちょうど現在のバイア州に到着した記念日であった。カルドーゾ大統領を含む政府高官が参列し大々的な記念式典が、同日、同所で行われ、全世界的なメディアの注目を浴びた。一方、黒人や先住民にとって、ポルトガル人の到着は搾取の歴史の始まりとして、市民団体のいくつかが祝典に対する異議を申し立てようとデモを計画していた。デモは正当な手続きを経て穏当に行われることになっていたが、祝典当日、彼らは強制的に排除された。
- 48) 19 世紀半ばにリオ・デ・ジャネイロ市に建造されたイタマラチ宮殿にその本部を置いたことから、ブラジル外務省は伝統的にイタマラチと呼ばれている。
- 49) 環境と開発に関する国際連合会議が正式名称。持続可能な開発を目指す「リオ宣言」と、この宣言に組み込まれた理念の実現のための実行計画するための「アジェンダ 21」が合意された。
- 50) 政府は、政府系黒人組織であるバルマーレス文化財団を通じ、ブラジルにおける地域会議の開催を拒否した。政府には、会議開催によりブラジルの人種関係について人種主義的なイメージが強調されることを回避する意図があったと思われる。一方、バルマーレス文化財団は、黒人の代表でありながら、政府におもねる態度をとったことで、他の黒人運動組織から反発された。これらはいずれもメディアによって大々的に伝えられた。
- 51) ブラジルの 5 大新聞は、開催中の 1 週間に 170 の関連記事を掲載した。
- 52) ダーバン会議は 2001 年 9 月 8 日に終了したが、その 3 日後の 11 日、アメリカ同時多発テロ事件が起きた。この事件はブラジルでも大きく取り上げられ、ダーバン会議の熱狂に水を差した。
- 53) 本名はルイス・イナシオ・「ルーラ」・ダ・シルヴァ。1945 年生まれ。
- 54) 1958 年生まれ。2010 年の大統領選にも出馬した。

- 55) ミルトン・ゴードンの同化理論により規定されている。ミルトン・ゴードン（倉田知四生・山本剛郎訳）『アメリカンライフにおける同化理論の諸相』晃洋書房，2000年参照のこと。
- 56) Telles, op.cit., pp. 5-6.
- 57) 1900-1995年。『Negroes in Brazil: a Study of Race Contact at Bahia, Chicago, 1942』を記した。
- 58) その後も合衆国の社会学者の多くがブラジルを訪れ，多くの研究結果が公表された。詳細はマークス，前掲書，訳者補論を参照のこと。
- 59) Telles, op.cit., pp. 173-214.
- 60) 注34を参照のこと。
- 61) ユネスコの意図は，当時の戦争や人種主義など混沌とした社会情勢の中，ブラジルに調和の理想を見出そうとする趣旨だった（Telles, op.cit., p. 7）。
- 62) 非白人と白人の所得較差は，合衆国よりもずっと大きい。ブラジルにおける非白人の所得は，白人の40～50%であるのに対し，合衆国の黒人の所得は白人の75%である（ibid., pp. 107-109）。社会的流動性から見ると，貧困層にある白人が中間層へ上昇する可能性は，非白人の2～3倍高い。中でも非白人女性は職業構造の底辺に固定化されている（ibid., pp. 142-145）。そのほか，就職，教育，警察との関わりなど，多くの場で肌の色による処遇の違いが見られる。
- 63) これらの第2世代の研究成果については，富野幹雄の2000年代の一連の研究を参照のこと。
- 64) ジェルソン・ベレス議員とアブディアス・ド・ナシメント議員の1985年の議会におけるユーモラスとも言えるやりとりをテルズはエピグラフで紹介している（Telles, op.cit., p. 78）。
- 65) ibid., p. 273の注の27。
- 66) 世界銀行の2000年の報告書によれば，ブラジルは150カ国のうち，ジニ係数が3番目に高かった。ブラジルより高い国はスワジランドとシエラレオネというアフリカの小国であることを考慮すれば，実質的にブラジルの貧富の差は最も高いと言える（ibid., p. 107）。

参考文献

アダムズ，マーク・B編著（佐藤雅彦訳）
1998 『比較「優生学」史』，現代書館。

浅香幸枝編
2009 『地球時代の多文化共生の諸相』，行路社。

池本幸三編
1992 『近代世界における労働と移住』，阿吽社。

池本幸三ほか
1995 『近代世界と奴隷制』，人文書院。

伊藤秋仁
2008 「ブラジルの人種」，『Problemata Mundi』第17号，京都外国語大学国際問題研究会。
「19世紀前半のブラジルにおける外国人入植者の導入」，『COSMICA』第38号，京都外国語大学。
「ブラジル帝政によるドイツ人の入植」，『Problemata Mundi』第18号，京都外国語大学国際問題研究会。

牛田千鶴編

2008 『ラテンアメリカの教育改革』, 行路社。

エルキンズ, S. ほか (山本新ほか訳編)

1978 『アメリカ大陸の奴隷制』, 創文社, 1978年。

川島正樹編

2005 『アメリカニズムと「人種」』, 名古屋大学出版会。

佐藤常蔵

1964 『ブラジルの移民史』, 帝国書院。

ゴードン, ミルトン (倉田知四生・山本剛郎訳)

2000 『アメリカンライフにおける同化理論の諸相』, 晃洋書房。

シーガル, ロナルド (富田虎男監訳)

1999 『ブラック・ディアスポラ』, 明石書店。

立石博高ほか編

2009 『国民国家と市民』, 山川出版社。

タネンバウム, フランク (小山起功訳)

1980 『アメリカ圏の黒人奴隷』, 彩光社。

デグラール, C. (儀部景俊訳)

1986 『ブラジルと合衆国の人種差別』, 亜紀書房。

富野幹雄

1981 「ブラジル社会と教育制度」, 『アカデミア』人文・社会科学編第33号, 南山大学。

1984 「ブラジルにおける所得格差」, 『アカデミア』人文・社会科学編第40号, 南山大学。

1997 「19世紀ブラジルの経済発展とコーヒー生産」, 『アカデミア』人文・社会科学編第66号, 南山大学。

1999 「現代ブラジルの人種関係」, 『アカデミア』人文・社会科学編第70号, 南山大学。

2002 「ブラジルの人種偏見と差別」, 『アカデミア』人文・社会科学編第74号, 南山大学。

2005 「ブラジルの人種差別の実態解明にむけて」, 『アカデミア』人文・社会科学編第81号, 南山大学。

2008 「ブラジルの教育における人種的不平等」, 『アカデミア』人文・社会科学編第87号, 南山大学。

富野幹雄編

2008 『グローバル時代のブラジルの実像と未来』, 行路社。

富野幹雄ほか

1991 『ブラジル』, 啓文社。

伊藤秋仁

富野幹雄ほか編

2002 『ブラジル学を学ぶ人のために』, 世界思想社。

中島嶺雄ほか編

1993 『転換期としての現代世界』, 国際書院。

南山大学ラテンアメリカ研究センター編

2004 『ラテンアメリカの諸相と展望』, 行路社。

ハウ, ケネス (大桃敏行ほか訳)

2004 『教育の平等と正義』, 東信堂。

フレイレ, ジルベルト (鈴木茂訳)

2005 『大邸宅と奴隷小屋』上下巻, 日本経済評論社。

細野昭雄

1983 『ラテンアメリカの経済』, 東京大学出版会。

マークス, アンソニー・W. (富野幹雄ほか訳)

2007 『黒人差別と国民国家』, 春風社。

宮島喬編

2009 『移民の社会統合と排除』, 東京大学出版会。

メジャフェ, R. (清水透訳)

1979 『ラテンアメリカと奴隷制』, 岩波書店。

山田陸男編

1986 『概説ブラジル史』, 有斐閣。

米村明夫編

2007 『貧困の克服と教育発展』, 明石書店。

Burdick, John,

1998 *Blessed Anastácia: Women, Race and Popular Christianity in Brazil*, New York, Routledge.

Carone, Iray & Bento, Maria Aparecida Silva (orgs.)

2002 *Psicologia social do racismo*, Petrópolis, Editora Vozes.

Lambert, Jacques

1967 *Os dois Brasis*, São Paulo, Editora Nacional.

Lovell, Peggy (org.)

1991 *Desigualdade Racial no Brasil Contemporâneo*, Belo Horizonte, UFMG/CEDEPLAR.

Novais, Fernando A. (coord.)

1997 *História da vida privada no Brasil 1*, São Paulo, Companhia das Letras.

História da vida privada no Brasil 2, São Paulo, Companhia das Letras.

1998 *História da vida privada no Brasil 3*, São Paulo, Companhia das Letras.

Nuna, Luiz

1976 *O negro na luta contra a escravidão*, Rio de Janeiro, Catédra.

Oliveira, Lucia Lippi

2001 *O Brasil dos imigrantes*, Rio de Janeiro, Jorge Zahar Editor.

Poppino, Rollie E.

1968 *Brazil*, New York, Oxford University Press.

Ribeiro, Darcy

1995 *O povo brasileiro*, São Paulo, Companhia das Letras.

Rodrigues, Nina

2004 *Os africanos no Brasil*, Brasília, Editora Universidade de Brasília.

Rossi, Cardeal Dom Angelo

1991 *Brasil: integração de raças e nacionalidades*, São Paulo, Editora C.L.

Sansone, Livio

2003 *Blackness Without Ethnicity*, New York, Palgrave Macmillan.

Silva, Alberto da Costa e

2003 *Um rio chamado Atlântico*, Rio de Janeiro, Nova Fronteira.

Silva, Martiniano J.

1995 *Racismo à brasileira*, São Paulo, Anita Garibaldi.

Skidmore, Thomas E.

1974 *Black into White: Race and Nationality in Brazilian Thought*, New York, Oxford University Press.

Telles, E. Edward

2004 *Race in Another America: The Significance of Skin Color in Brazil*, Princeton, Princeton University Press.

